

フィールド撮影データは何を語るか?

What does the field recording data manifest?

伝 康晴 *1

Yasuharu Den

*1 千葉大学大学院人文科学研究院

Graduate School of Humanities, Chiba University

I have been conducting, for six years, fieldwork at Nozawa-Onsen village in Nagano Prefecture, in which my colleagues and I video-record and analyze a huge number of people working together for the preparation of a fire festival. The recorded data primarily serves as a basis for analytic works, but it also manifests what the investigators are attending and how much distance, or *maai*, they are creating to the focused objects/persons. I discuss how these have changed through an experience of the six years, based on the video data recorded by myself.

1. はじめに

筆者らは 2012 年から長野県の野沢温泉村で祭りの準備作業に関するフィールドワークを行なっている [榎本 18]。聞き取り調査や史料・資料収集を中心とする従来の民俗学・人類学的研究とは異なり、我々はさまざまな場面で行なわれる活動の映像収録とそれに基づく相互行為分析を中心に研究を進めている。

このようなフィールド撮影データは、第一義的には、調査対象となる人々が個々の場面での活動をことばや身体を用いてどのように組織しているかを記述・分析するための基礎資料である。しかし、さまざまな場面で同時多発的に生じる活動を複数の調査者で同時に撮影する我々のフィールドにおいては、撮影データはまた、個々の調査者がその都度の場面で何／誰に注意を向け、その被写体とどのような距離感 (= 間合い) で接していたかの一人称的視点からの記録でもある [伝 15]。

本研究では、このような観点から、筆者自身の撮影データを対象として、6 年間のフィールドワークで撮影時の間合いにどのような変化が生じたかを検討する。

2. フィールドワークの概要

長野県下高井郡野沢温泉村で毎年 1 月 15 日に行なわれる道祖神祭りの準備場面のフィールドワークを行なっている。主要な準備作業は 10 月の御神木伐採 (祭りの舞台となる社殿の造営に用いる木材を切り出す) に始まり、1 月 13 日の御神木引き (山の途中に残しておいた 2 本の御神木を村じゅう引き回して祭り会場まで運ぶ)、14 日から 15 日の昼過ぎまでに及ぶ社殿造営を経て、15 日夜の祭り本番でクライマックスを迎える。

祭りおよび準備作業の執行は、「三夜講」と呼ばれる、数え 42 歳厄年につらなる 3 学年によっておもに担われる (図 1)。これらの集団は多いときで 100 人にも達する。メインの祭り会場だけでも 40 メートル四方以上の広大な場所であり、それ以外にも村内のいくつかの場所に分かれて作業することもある。

調査者たちは最大 8 名ほどのチームを組んで撮影に臨み、手持ちカメラでさまざまな準備場面を撮影している。撮影対象が離れた場所に分かれる場合や、近接した範囲で多くの調査者が撮影する場合は、事前に各人の担当を打ち合わせることもあるが、基本的に何／誰を撮影するかは各人の裁量に任されている。

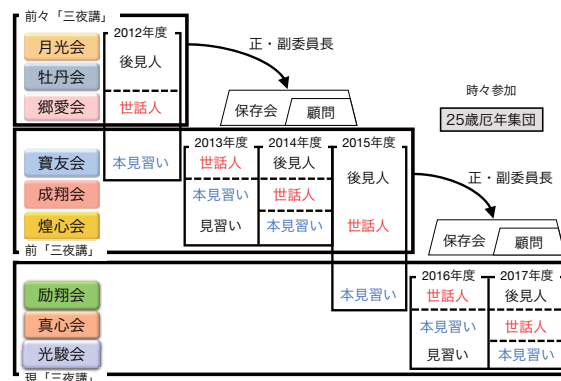


図 1 三夜講

3. 分析

3.1 対象場面

道祖神祭りに関わる撮影データは、筆者自身が撮影したものだけでも 6 年間で約 270 時間にのぼる。そこで、分析対象を 1 月 14 日～15 日昼過ぎまでの社殿造営場面に限る。この場面では、10 月に山で伐採した木材を用いて、重機を用いず人力で巨大な社殿を組み立てる。三夜講の 3 学年全メンバーに加え、25 歳厄年が実動部隊として参加し、さらに、三夜講を終えた保存会・顧問といったメンバーが指導者として参加する。総勢 100 人に達する大集団である。

作業は係ごとに分かれて、それぞれの持ち場を担当する。主な作業は、木材を準備する、木材を社殿に乗せる、社殿の上で木材を組んで縄でしばる、社殿の形 (木材の間隔や出っ張り具合) を整えるなどであり、これらの工程は保存会の最上位にいる社殿棟梁によって指揮される。

以下では、時の社殿棟梁たちが社殿から離れた場所にたたずみ社殿を見つめる場面に注目し、筆者の撮影アングルの 6 年間の変遷を見る。

3.2 1 年目 (2012 年度)

調査開始 1 年目 (2012 年度) に見られた典型的な撮影アングルの図 2 に示す。この年は、道祖神祭りのことも、三夜講や彼らの活動についても、ほとんど知識を持っていなかった。まさに、目の前で起こった出来事を訳も分からず撮影していたとい



図2 1年目（2012年度）の典型的な撮影アングル



図3 2年目（2013年度）に見られた撮影アングル。社殿棟梁は2012年度の次期社殿棟梁

う状態である。三夜講の長である道祖神委員長と、それとは別に、社殿造営を指導する社殿棟梁がいるということはなんとなくわかった。次期社殿棟梁が、次年度以降のために社殿棟梁に付いて見習いをしていたということは後になってわかった。

2世代の社殿棟梁（現社殿棟梁と次期社殿棟梁）が並んで社殿を見つめる図2は、この場面の典型的なシーンである。筆者は彼らの斜め後方から撮影している。この年は、このようにたたずんでいる人たちを前方から撮影しているシーンはほとんどない。被写体と筆者との心理的な距離は大きく、まだ彼らの間合いに入り込めていないという状態である。

3.3 2～3年目（2013～2014年度）

2年目（2013年度）になると、図3のように、たたずむ人たちの前方から撮影した映像が散見するようになる。委員長を含む、この年の世話人集団（實友会）とは、10月の行事あたりから仲良くなり、我々調査チームが野沢の人たちに受け入れられ始めたのがこの年である。そのため、作業に従事している人たちをかなり近い距離から撮影したものが増える[伝15]。

図3もそのような傾向の中で見られた撮影アングルである。たたずむ人たちを前方から至近距離で撮影するというのはかなり敷居の高いことであり、ある程度のラポールが形成できていないと難しい。ただし、この時点では当時の社殿棟梁とはまだそれほど親密ではなく、実際には多少の距離感があつたと記憶している。次年度（2014年度）にはそれも解消し、図3と同様な至近距離からの撮影アングルが多く見られるようになる。

社殿を見つめる人たちを前方から撮影することで、彼らが注視している社殿や、（社殿棟梁たちとやり取りする可能性がある）社殿上の人たちはフレームに収めることができない。この頃は撮影チームの中での分業が整い始めた頃で、一人がこのようなアングルで撮影すると、誰か他の調査者が逆側（社殿の側）を撮影していることが多かった。このことも、被写体との間合いをつめる一因となったかもしれない。



図4 6年目（2017年度）の典型的な撮影アングル。社殿棟梁は2013年度の委員長

3.4 4年目（2015年度）以降

4年目（2015年度）以降からは別の撮影方略を使い始めている。図4は最新の2017年度（6年目）の撮影データに典型的に見られる撮影アングルである。図2と同様に、2世代の社殿棟梁が並んで社殿を見つめている。筆者は、彼らの真後ろから社殿の方向を撮影している。

一見すると1年目（図2）の撮影の仕方に回帰したように見えるかもしれない。しかし、このアングルの意図は1年目とはまったく異なる。図2は社殿棟梁を含む人々と社殿とを俯瞰的にフレーム内に収めたものである。一方、図4は社殿棟梁の視点から社殿をフレーム内に収めたものである。いわば、筆者が社殿棟梁と一体化し、目の前にある情景を記録しようとしたものである。社殿棟梁の間合いに飛び込み、彼と筆者自身の身体とを重ね合わせることで生まれた撮影アングルと言える。

4. 議論

社殿棟梁たちが社殿から離れた場所にたたずみ社殿を見つめる場面に注目し、筆者の撮影アングルの6年間の変遷を見た。調査開始直後は被写体の背後から俯瞰的に撮影していたのに対し、ラポールが形成され始めると、前方至近距離からの撮影が多くなった。しかし、さらに時を経ると、被写体の一人称視点からの情景をとらえようという志向が見られるようになった。

これらの変化は、調査者と被写体との間合いの変遷の現れと言える[諏訪17]。当初は間合いが遠く、フィールドで受け入れられるにつれて、だんだんと間合いが近くなる。それ以上近づけなくなると、今度は、自己と相手の身体を重ね合わせる方向に変化し、相手の間合いに飛び込む。このような心理的な変化がフィールド撮影データから読み取れるように思える。

もちろん、これらの解釈は主観的なものであり、撮影アングルの決定には他にもさまざまな要因が関与しているだろう。しかし、フィールド撮影データを調査者自身の「心の動き」の一人称的記録とみなし、研究の俎上に載せるという方向性は、「臨床の知」への新たな可能性を開くものではないだろうか。

参考文献

- [伝15] 伝 康晴：心の間合い：フィールド撮影データに見るラポール、日本認知科学「間合い」研究分科会, Vol. JCSSL SIG Maai, 2015, No. 1, pp. 7–12 (2015)
- [榎本18] 榎本 美香, 坊農 真弓, 細馬 宏通, 伝 康晴, 高梨 克也, 寺岡 丈博, 阿部 廣二, 坂井田 瑠衣：第40回研究大会ワークショップ：祭りの伝承にみられる共同体〈心体知〉, 社会言語科学, Vol. 20, No. 2 (2018)
- [諏訪17] 諏訪 正樹, 坂井田 瑠衣, 伝 康晴：間合いと身体知, 人工知能, Vol. 32, No. 2, pp. 255–262 (2017)